博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）橋本雄一 印

学位申請者　　高 橋梓 氏

論　文　名　　金史良の二言語文学研究―植民地期の朝鮮語／日本語による創作を中心に

【審査の経過と結論】

高橋梓氏から博士学位請求論文「金史良の二言語文学研究―植民地期の朝鮮語／日本語による創作を中心に」が提出されたことをうけ、2019 年 1 月 16 日開催の総合国際学研究科教授会にて審査委員会が選任され、審査が開始された。

審査委員は、橋本雄一（本学准教授、副指導教員、中国文学・植民地文化研究）が主査を務め、副査に米谷匡史（本学教授、指導教員、近代日本思想史・社会思想史）、丹羽泉（本学教授、副指導教員、宗教社会学・朝鮮宗教論）、柴田勝二（本学教授、近現代日本文学）、中野敏男（本学名誉教授、歴史社会学）、以上 5 人の委員から構成されている。

審査委員会は、各委員がそれぞれの見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で、2019 年 2 月 7 日（15 時から 17 時）に、本学アゴラグローバル 3 階プロジェクトスペースにおいて公開の最終試験（口述試問）を実施した。その結果、本論文が評価基準に照らして、博士学位を授与する水準に達していると判断した。審査委員会は全員一致で、高橋梓氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本論文は、1940 年前後に日本文壇で活躍した朝鮮人作家・金史良（キム サリャン）の文学を、植民地帝国における二言語文学としてとらえかえし、再検討するものである。従来は、主に日本語作家として論じられてきた金史良が、朝鮮語でもさまざまな小説・評論・エッセイなどを書いていたことに注目し、ほぼ同じ内容で朝鮮語および日本語で書かれた一連の対の作品を具体的にとりあげて分析している。

主にとりあげるテキストは、朝鮮語作品「留置場で会った男」と日本語作品「Q 伯爵」、朝鮮語作品「チギミ」と日本語作品「蟲」、朝鮮語紀行文「山家三時間」と日本語紀行文「火田地帯を行く」、北京での漫遊についての朝鮮語随筆「北京往来」と日本語随筆「エナメル靴の捕虜」、日本への密航についての朝鮮語随筆「密航」と日本語随筆「玄海灘密航」、などである。

本論文の構成は以下の通りである。

序論

第一章　金史良の日本語文学が生成された批評空間
　　—植民地出身作家の交流の場としての『文藝首都』

第二章　朝鮮語作品「留置場で会った男」と日本語作品「Q伯爵」の表現の差異をめぐる考察

第三章　朝鮮語作品「チギミ」と日本語作品「蟲」の改作過程の考察
　　—朝鮮人移住労働者の集住地をめぐる表現の差異

第四章　朝鮮語紀行文「山家三時間」と日本語紀行文「火田地帯を行く」の表現の差異をめぐる考察—二言語の紀行文に見られる山民へのまなざしの変化

第五章　北京での「漫遊」と日本への「密航」をめぐる二言語随筆における表現の差異の考察—移動と創作言語から見た金史良文学の生成

結論

まず序論では、金史良が日本語著作を数多く発表していた時期に、朝鮮語でもさまざまな著作を発表していたことに注目して、日本語著作と朝鮮語著作が掲載されるプロセスの差異や、植民地帝国における言語・メディア・読者の問題などを検討した。また、金史良文学をふくむ植民地期の朝鮮文学をめぐる先行研究について、韓国の民主化前後の 1990 年代以前と 1990 年代以降に分けて検討している。近年の研究において、抗日・抵抗／親日・協力の二分法による評価をこえて、植民地帝国が抱えた矛盾・葛藤のなかで金史良の文学を読み直す研究が現れていること、特に「二重言語創作」に注目する金允植や鄭百秀らによる研究の進展をふまえて、本論文の視座を提示している。

本論文では、二言語著作は異なるメディアの異なる読者を想定して書かれ、異なる文脈を持っていることに注目し、二言語の著作（小説、紀行文、随筆）の差異を詳細に分析することを通じて、金史良の問題関心の形成過程や、創作の試行錯誤の過程をより深く解明していくことを目指している。その際、日本語の同人雑誌『文藝首都』への参加を通じて、金史良は、朝鮮人作家の張赫宙や金達寿、台湾人作家の龍瑛宗らと交流をもち、植民地出身作家同士のネットワークが形成されていたことに注目している。また、1931 年の日本への渡航の際に「密航」を試みたこと、1939 年に北京を「漫遊」し、朝鮮人の集住地を訪れたことに注目し、移動の経験を通じて金史良がさまざまな階層の朝鮮人に関心を向けるようになり、日本における朝鮮人移住労働者の集住地や、朝鮮の山間地の火田民・山民などを描く随筆や作品を書くようになったことを検討している。

第一章では、二言語著作の分析に先立って、日本語の同人雑誌『文藝首都』が、植民地出身作家たちが出会い、ネットワークを形成する場となっていたことを解明している。保高徳蔵が主宰した『文藝首都』には、多くの植民地出身作家たち（朝鮮人作家の張赫宙、

金史良、金達寿、台湾人作家の龍瑛宗ら）が参加しており、たがいに交流をもっていた。この章ではとりわけ、雑誌の巻末に掲載されている各地の支部の「読者会」の記録に注目し、植民地出身作家の作品にたいする同人・読者の評価の傾向を分析した。また、金史良が龍瑛宗や金達寿に宛てた書簡をとりあげ、日本人の同人・読者とは異なる問題関心が植民地出身作家の間で共有されていたことを明らかにしている。

第二章では、ほぼ同じ内容が書かれた朝鮮語作品「留置場で会った男」（『文章』1941年2月）と、日本語作品「Q伯爵」（短篇集『故郷』1942年4月）に注目し、両者の表現の差異を詳細に明らかにしながら分析している。これらの作品には、日中戦争からアジア・太平洋戦争へと向かう中で、帝国日本の「挙国一致」の体制や「更正」を意識し内面化せざるをえない朝鮮知識人たち（「われわれ」）が描かれるとともに、このような「国民化」から逸脱した存在である「王伯爵」／「Q伯爵」がくりかえし登場する。朝鮮語作品で描かれる「われわれ」の「伯爵」への共感は、朝鮮知識人が帝国日本の「国民」として自らを意識する際の揺れや迷いの表現として解釈できる。他方で、日本語作品では、「われわれ」の「伯爵」への共感が徐々に弱まっていくように描かれている。このような二言語作品の差異について、高橋氏は、金史良が日本語で作品を発表する際に、帝国日本の国策を意識しながら表現を選び直さざるをえなかった痕跡として解釈している。

続く第三章では、もう一対の二言語作品として、朝鮮語作品「チギミ」（『三千里』1941年4月）と、日本語作品「蟲」（『新潮』1941年7月）をとりあげ、両者の表現の差異を詳細に明らかにしながら分析している。これらの作品には、船の積荷の荷下ろしをする沖仲仕として働く朝鮮人移住労働者の集住地が形成された東京・芝浦海岸を舞台に、集住地を訪れる語り手と、集住地に住み着いて「チギミ」と呼ばれている奇妙な老人との交流が描かれている。朝鮮語作品では、集住地を訪れる語り手の「孤独」の変化についてははっきりとは描かれず、また集住地の空間的な特徴をめぐる描写が目立っている。他方で、日本語作品では、集住地における語り手の「孤独」の変化や、集住地で過ごす労働者たちのさまざまなふるまい・表情が具体的に描かれ、「メッカ」「メヂナ」などの言葉が暗号のように用いられて、日本「内地」における異質な「別世界」としての集住地の特徴がより強調されて表現されている。このような二言語作品の差異について、高橋氏は、日本において異質な文化を共有する朝鮮人移住労働者の集住地という題材に、金史良が新たな可能性を見出していった過程を示すものとして解釈している。

第四章では、朝鮮の山間地帯での調査・取材の経験をもとに書かれた朝鮮語紀行文「三家三時間」（『三千里』1940年10月）と、日本語紀行文「火田地帯を行く（一）～（三）」（『文藝首都』1941年3～5月）の表現の差異を分析している。これらの紀行文では、語り手が同行者である劇作家・金承久とともに江原道の山間地帯の人々の生活を取材する調査に向かう途中で、悪天候のために足止めになり、山民の家で過ごした際の出来事が描かれている。朝鮮語紀行文では、山民の家で食糧を要求するバスの乗務員・乗客の態度に対

する「私たち」の怒りが見られるが、途中で語りが「私」に変化するにつれて、山民が間接的に「掠奪」されている問題へと意識が向けられていった。他方で、日本語作品では、同行者が「K」とされて金承久の名前は明記されず、「僕」の語りに揺れは見られない。また、バスの引き上げ作業に動員された山民が、洪水で流されそうになった「薪の城」を気にかけて発する叫び声が、バスの乗務員によってかき消される描写や、火田民出身の酌婦のエピソードからは、植民地支配を通じて山間地帯に形成された階層が浮き彫りにされ、森林開発が山民の生活に与える影響がより深く描かれている。

さらに第五章では、渡航証明書を持たない金史良が1931年に日本への「密航」を試みた経験について書かれた朝鮮語随筆「密航」（『文章』1939年10月）と日本語随筆「玄海灘密航」（『文藝首都』1940年8月）、そして、1939年3月末から4月上旬にかけて北京を「漫遊」した経験について書かれた朝鮮語随筆「北京往来」（『博文』1939年8月）と日本語随筆「エナメル靴の捕虜」（『文藝首都』1939年9月）をとりあげ、朝鮮語随筆と日本語随筆の表現の差異を分析している。北京での「漫遊」についての一対の随筆では、日中戦争下の北京において、自らを中国人による「ゲリラ戦」の「敗残兵」／「捕虜」としてとらえる認識が見られる。その上で、日本語随筆ではさらに、北京に住む朝鮮人移住者が中国人を日本語で一喝したエピソードが挿入されている。また、「密航」経験についての一対の随筆では、日本において朝鮮人移住者が取り締まりの対象とされることへの怖れが敏感に描かれている。その上で、日本語随筆で加筆された部分では、朝鮮人の密航が命がけの渡日であることが強調されるとともに、末尾では「白い着物」を着て海辺を歩く朝鮮人女性たちの姿に美しさを見出している。

結論では、本論文で論じてきた二言語の作品・紀行文・随筆について時系列で整理しなおしながら、議論をまとめている。一連の二言語著作に注目し、朝鮮語テキストと日本語テキストの間の差異を詳細に分析することによって、日本語著作のみを論じる場合には見えてこなかった金史良の創作における試行錯誤の過程や、問題関心の形成過程をより深く明らかにすることができた。

また、本論文では十分に論じられなかった今後の課題として、①朝鮮文壇で活躍する作家たちとの交流や、金史良の朝鮮語作品への評価を明らかにすること、②台湾人作家・龍瑛宗との交流や、中国人作家・魯迅の「阿Q正伝」への関心について、より深く論じていくこと、③二言語ではなく同じ日本語で複数のメディアに発表された類似の著作群をめぐって、改作過程や表現の差異を分析していくこと、④金史良が李光洙など他の作家たちの朝鮮語作品を日本語に翻訳する際に見られる差異や、「方言」使用などの特徴を分析していくこと、⑤植民地期の二言語による創作活動が、解放後の朝鮮語による創作にどのような影響を与えたのかを明らかにすること、などを挙げている。

【審査の概要および評価】

2019年2月7日に実施された公開の最終試験（口述試問）では、高橋梓氏が本論文の概要、本論文の学術的意義、そして今後に残された課題について簡潔にプレゼンテーションをおこなった。その後、審査委員と高橋梓氏の間で質疑応答を行った。その概要は以下の通りである。

まず、従来は主に「日本語作家」として論じられてきた金史良の文学を、二言語文学としてとらえなおし、朝鮮語／日本語で書かれた一連の対のテキスト群をとりあげてその差異を詳細に分析していく方法は優れたものであり、既存の研究水準をさらに高める重要な成果であることが高く評価された。

また、従来の研究では、金史良が日本文壇に登場した1940年前後の作品については民族主義の「抵抗」作家として高く評価されながら、その後の1941年以降の作品については、民族主義による「抵抗」が「後退」したと評価されがちであった。これに対して、本論文では、1941年以降の作品についても、金史良がさまざまな問題関心を深め、新たに試行錯誤を重ねていった過程として読み直す道を開いていることも高く評価された。

このような本論文の研究方法と研究成果は、金史良研究や植民地帝国の文学研究に対してオリジナルな貢献を果たしているものであり、博士学位を認定する水準に達していると評価できるものになっている。

しかし他方では、以下のような疑問や批判も提示された。

①本論文では各章において、それぞれ対の作品群についての独立した分析をおこなっているが、それらをふまえて、金史良の二言語創作をめぐる試行錯誤がどのような創作戦略であったのか、一貫したものとして十分には分析できていない。第一章では、日本語メディアがうみだした植民地作家のネットワークが論じられているが、その視点が第二章以降の作品の分析に十分に生かされていない。朝鮮語メディアをめぐる言語・メディア・読者の問題をふくめて、より立体的に論じていくこと、そのなかで、金史良の二言語による創作戦略をより深く論じていくことが必要であろう。

②植民地作家が二言語を用いて創作する文学は世界各地で見られるが、金史良の場合はどのような言語意識を持って創作していたのか、その二言語創作に見られる「意識の揺れ」に内在した分析が十分に掘り下げられていない。また、植民地朝鮮と帝国日本の狭間の政治的・社会的状況について、金史良は具体的にどのようにとらえていたのか、論証が不足しており、やや一面的な記述になっている。

③二言語の対の創作について、両者の間の差異は詳細に分析されているが、朝鮮語作品、日本語作品のそれぞれについて、文学作品としての物語の構造・特質を解明していくテキスト分析の面では、やや弱い面があり不十分である。二言語における表現の差異をふまえて、さらに作品分析を深める必要があると思われる。

④植民地の朝鮮語と、帝国の日本語を一対のものとしてとらえ、二言語文学を論じていく視座は重要である。ただし、朝鮮語、日本語はそれぞれ均質なものではなく、方言などの多様性が見られる。その場合、植民地作家にとって、母語・朝鮮語の方が方言の多様性をもつのに対して、むしろ母語ではない国語・日本語の方が共通語に標準化されていることが考えられる。そして、朝鮮語テキストの中にも日本語が現れ、日本語テキストの中にも朝鮮語が現れる。このような言語状況の複雑性についても、より意識的に分析することが望ましい。

⑤金史良と同時代の植民地朝鮮には、二言語で創作した作家たちが他にもいる。金史良と同様に、まず朝鮮語で書いてから日本語で書き直す作家たちもいれば、その逆に、先に日本語で書いてから朝鮮語で書き直す作家たちもいる。二言語によるメディア・読者の狭間で、両者を媒介しながら創作することについて、金史良はかなり意識的な文学者であったと思われる。また、短篇「草深し」（1940年7月）のように、日本語で書かれていながら、朝鮮語と日本語の通訳・翻訳の問題が書き込まれた興味深い作品も書いている。金史良の言語をめぐる創作戦略や、朝鮮文壇と日本文壇を媒介する文学活動について、さらにダイナミックに論じていく視座が必要ではないか。

以上のような疑問や批判に対して、高橋梓氏の応答は的確であり、自らの論考で明らかにし得た点とその限界、今後に残された課題について明確に自覚したものであった。また、上記のような疑問や批判は、本論文の達成や貢献を高く評価したうえで、さらに深めていくために提示されたものであり、その研究の意義を損ねるものではないことは、審査委員の共通認識である。

このような審査をふまえて、審査委員会は、高橋梓氏の博士学位請求論文「金史良の二言語文学研究―植民地期の朝鮮語／日本語による創作を中心に」は、金史良研究や植民地帝国の文学研究に対して、オリジナルな貢献を果たす重要な研究成果であることを確認し、全員一致で、高橋梓氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。